

連載

# 10 在宅医療奮闘記

平成7年より  
在宅を開始した

私の思い出

(医)東西会 千舟町クリニック院長

橋本 満義 (62歳・内科)

## 困難な往診 そして “ありがとう”の言葉



平成10年ころの話です。突然の往診依頼がありました。

当院より片道40分の菅沢町と柳谷町の患者さんが発熱で食事あまり取れないとのこと。急ぎ往診し、点滴や抗生物質投与、そして血液検査を行いました。その後、毎日訪問することとなったのです。患者さんは入院治療を拒否され、自宅療養を強く希望されました。

そんなある日、夜間往診依頼の電話が鳴りました。外は一面の雪化粧、山間部は路面凍結しているようなのでタクシーで向かうことにしました。道中、タクシーの運転手さんに「もしスリップ

事故で崖から落ちたりでもしたら、ちゃんと補償してほしいので大手のタクシー会社さんをお願いしたんですよ」などと冗談を言ってみるところ怖がっていました。

やっと患者さん宅に到着し必要な処置をしての帰り際、95歳の患者さん(女性)が私にむかって「ありがとう」と言ってくれました。この時、私は『あなるほど、この一言で医者冥利に尽き、諸先輩方も往診しながら、患者さんとの信頼関係や仕事の充実感と感動を得ていたのだろう』と確信しました。

その後も私は、いつでもどこでも往診に行くこ

とにし、患者さんの視点で医療を考えることの重要性を再確認したのです。

私は医師となり、大学病院で研修し済生会病院へ出向、国立がんセンターや大阪成人病センターで研修、そして漢方医学も修得しましたが、それまではすべて施設内で患者さんを診察し、医療というものをみてきたのです。

しかし、在宅医療を開始してから、患者さん宅の窓から医療というものを眺めると全く違った風景であることに驚かされました。やはり患者さん中心の医療が王道であると思います。

**「お医者さんが来てくれる」**  
質の高い在宅医療・看護・介護  
を『千舟町クリニック』は目指しています。



機能強化型・有床 在宅療養支援診療所

**(医)東西会 千舟町クリニック**

松山市千舟町6-4-9 Tel:089-933-3788

<http://www.touzaikai.jp/>